現代社会における見るスポーツの価値
―ソーシャルキャピタルの可能性―

The value of spectator sport in modern society

―Potential of social capital―

１Ｋ０７Ｂ０６４６　菊池隆寿

指導教員　主査　太田章先生　　副査　葛西順一先生

【序論】

自らがサッカークラブを熱心に応援してきた経験と、現在では全く関心を持っていない二面性から、現在の「見るスポーツ」とは、存在する名分とはなにかに関心を持ったことより本論を書く動機となった。

【１章　発展する日本のスポーツ】

経済状況を受け、企業スポーツは休廃部が次々と相次いだ。しかし、経済環境に影響された企業スポーツの状況とは異なり、新たなるリーグが始まり多くのプロスポーツクラブが誕生した。しかし、すべてのチームが成功しているわけではなく、解散するチームも現れ始める。このような現在を、「否定の否定の法則」の発展段階だととらえる。さらに、町田の問題提起を受けることで、これこれからの解決の方向性を探っていく。

【２章　プロスポーツと地域発展】

Jonson 、Ingham の先行研究により「人々の間の仲間意識を引き出すつながりの少なさ」と現在のスポーツと都市との関係を明確に述べる。さらに個人との関係においても、社会の仮定法とのスポーツとして位置付ける。

【３章　コミュニティとスポーツの関係】

「新しい公共性」への関心が高まりをうけ、新しいコミュニティ形成論の上で、スポーツがどのような役割を明確に果たすことが必要だという、都市コミュニティ論からの指摘を述べる。

【４章　現代社会のコミュニティ論の「見るスポーツ」の再定義】

時代の変化として、エリアスの「われ＝われわれ」のバランスに現代社会のあり方を見る。人々は、様々なアイデンティファイする対象を求め、個をもとにアソシエーションを組む。そして、人々のスタジアム内での反応を述べる。

【５章　スポーツの価値としてのソーシャルキャピタルの可能性】

ソーシャルキャピタルという言葉自体の定義がないため、それぞれに考えられている定義を紹介する。そのうえでグラフ化した関係性の中で、スポーツの価値を「公共財への移行を試みる段階のクラブ財」として定義化する。

【結論】

いかに公共財としてのソーシャルキャピタルの機能を高め、それがより多くのプロスポーツクラブの周りを取り囲む関係者に認知されるかがポイントとし、クラブ自体がこれまでの枠を外れ、ソーシャルルキャピタルとしての効果を還元していくことと結論づけた。

〈キーワード〉

見るスポーツ　弁証法　ソーシャルキャピタル